

湖水への祈り 大徳寺伝来の五百羅漢図と東銭湖

井手 誠之輔 (IDE Seinosuke) 九州大学大学院人文科学研究院教授

主な著書・論文

- ・「寧波をめぐる場と美術」『寧波の美術と海域交流』(中国書店、近刊)
- ・「大徳寺伝来五百羅漢図試論」『聖地寧波 - すべてはここからやってきた』展カタログ(奈良国立博物館、2009年7月)
- ・「諸尊降臨図」(『國華』1353、2008年7月)
- ・『日本の宋元仏画』(『日本の美術』418号、至文堂、2001年2月)

大徳寺伝来の五百羅漢図は、寧波の東、東銭湖の北西畔に所在した恵安院の僧義紹が、淳熙5年(1178)から10年間の年月をかけて勧縁し、林庭珪と周季常の二人に描かせて施入したもので、100幅にわたる壮大な全容のなかに羅漢たちをあらわしている。その内容は、羅漢の神通力ばかりでなく、さまざまな主題の仏教説話や仏教史上の事件、僧院における集団生活や法会のようなすを活写した風俗描写などがみられ、当時の仏教界の動向やその歴史認識にかんする視覚情報の宝庫となっている。1956年の方聞氏の先駆的な業績以来、必ずしも本図の研究が大きな進展をみせたわけではないが、このたびの展覧会で全容が初めて公開され、予備調査の段階で、最終的に48点の画幅から銘文が確認されたことは大きい。本発表では、五百羅漢図が施入された恵安院が所在した場のもつ意味と機能に注目し、次の2つの観点から、大徳寺本の制作背景を探ることにしたい。

一つ目の観点は、恵安院に近隣する月波寺や尊教院で行われていた四時水陸道場との関係である。志磐『仏祖統紀』によると、月波寺は、孝宗朝に宰相となった史浩(1106~1194)が乾道9年(1173)に創建した天台寺院で、鎮江の金山寺に倣って四時水陸道場を開設していた。この四時水陸道場は、志磐の時代まで約100年間存続し、近隣する尊教院でも3000人にもおよぶ僧俗が道場を運営していたという。志磐は、現在も通行している水陸会の儀文『法界聖凡水陸勝会修斎儀軌』6巻の筆者でもある。大徳寺本には、焰口餓鬼に阿難が施食する画幅(ボストン美術館)や、梁の武帝に水陸会の創設を助言した宝誌和尚が十一面観音に変身する姿をえがいた画幅(ボストン美術館)、戦没者供養の法会をあらわす画幅(大徳寺)が含まれているほか、先祖の亡魂とおぼしき人々や鬼たちがたびたび登場し、水陸会との密接な関係性を指摘することができる。

二つめの観点は、淳熙3年(1176)に行われた東銭湖の浚渫事業との関係である。『宝慶四明志』によれば、当時、東銭湖では、湖面が水草によって覆い尽くされ十分な灌漑用水が確保できなくなったため、水草の浚渫が喫緊の課題となっていた。判知州として明州に着任した孝宗の第二子魏王愷は、上奏によって宮廷から費用を捻出し、淳熙3年(1176)ようやく半年をかけて事業を実現した。大徳寺本の銘文に登場する人々の居住地域は、東銭湖の水利権を有する地域と重なり合い、さらに画幅の施入者に数多く登場する翔鳳郷の顧氏一族が、この浚渫事業に積極的に関与していたことが判明する。恵安院が所在した青山には、唐宋の間、東銭湖の水利事業に功績のあった陸南金と李夷庚を顕彰する嘉澤廟が存在し、湖水の恵みに感謝を捧げる儀礼の場として機能していた。湖水の恵みをとおして世代を継いでいく東銭湖の地域住民にとって、世代を超えて生き続ける羅漢は、その宗族の安寧を見守り続ける祈りの対象として信仰されていたのではないだろうか。

大徳寺伝来の五百羅漢図の制作背景には、魏王や史浩に代表される当時の権力者や地域の有力者たちが、東銭湖の水の恵みをキーワードとして結びついている。こうした大徳寺本の背景に浮かびあがる中央と地域との重層的な人々の結びつきは、大徳寺本の制作地や中央画壇との関係性についても新たな解釈を必要とする。発表では、12世紀後半という時代における大徳寺本の絵画史的な位置について新たな展望を示すことにしたい。